

全公図参考事務研究集会に参加して

鈴木尚子

昭和63年度全国公共図書館参考事務研究集会(日本図書館協会公共図書館部会、千葉県教育委員会他主催)が、11月8、9日に、浦安市立文化会館において開かれた。8日の研究集会の様子について報告する。

研究主題は、「公共図書館における参考事務のネットワーク」ということであったが、狭義の意味での「参考業務」ということではなく、「参考業務」はほとんど図書館活動全体を包括する概念として位置づけられているような印象であった。

研究発表はいずれも、図書館活動の効率化にとって、地域や館種を越えた図書館ネットワークが不可欠となっているという共通認識のもとに、ネットワークの構想や実践に関するものであった。

最初に、当館図書館協力部長熊田氏が、「国立国会図書館のネットワーク構想」について講演した。'88年8月、「国立国会図書館関西館(仮称)設立に関する第1次基本構想」が発表されたこともあって、当館がネットワークをどのように考えているのかについては、高い関心が寄せられていた。熊田部長は、図書館におけるネットワーク形成の原点は、図書館利用者の最終的なニーズ(一次資料の入手)に添えていくことであると規定したうえで、図書館資料の相互利用のためには、ネットワーク内を流通する共通言語とも

言うべき書誌情報の整備、とりわけまず国内出版物の基本書誌情報データベースの整備が必要であること、そして、そのような全国的な図書館ネットワーク形成にとっての必要条件を整備していくことが、当館の果たすべき役割であると説明した。当館は、各々の地域の必要性に根ざして、自生的、自発的に形成された図書館ネットワークを援助することで、ナショナルセンターとしての役割を果たしたいと平易に明確に述べていた。

「北海道図書館情報ネットワーク構築の研究」と題する北海道産業調査協会理事大谷木賢二氏の講演は、全国に先駆け着手した、長年にわたるネットワーク研究の道筋とその調査結果の報告であった。ネットワーク構築のためには、基礎的な研究や準備が必要であり、またその地域の図書館が住民から信頼されるような活動を常日頃から行っていることが、重要なポイントであるということが痛感された。この一連の研究の総括として発表された「北海道図書館情報ネットワーク構築の研究・エグゼクティブ・サマリー」は、大変に格調の高いもので、その最後は、「図書館情報ネットワークの構想は、地域および国レベルにおける図書館関係者に与えられた歴史的課題である」と結ばれている。

次に事例発表ということで、富山県立

図書館調査課長太田久夫氏は、「富山県における図書館ネットワーク」について報告した。県立図書館が調査研究図書館として市町村に対して行っている活動（レファレンス、カード体総合目録、連絡車の運行による相互貸借、文献複写斡旋、書誌編纂など）の紹介は、興味深かった。県立図書館と言っても、必ずしも郷土関係のレファレンスが多いわけではないということであった。特殊コレクションである雪の文献室（1万2千冊）には全国から問い合わせがあるとのこと。また全国的に有名なカード体による県内総合目録は、今年度をもって従来のカードは凍結し、来年度からはコンピュータ入力となるそうである。年間約一六〇〇件におよぶ文献複写斡旋業務は、企業からの依頼が圧倒的に多く、そのほとんどは、外国雑誌論文だそうである。

富山県におけるネットワークとしては、砺波広域圏構想（昭和58年からスタート）と、北陸地区公共図書館コンピュータ化推進協議会（昭和58年に発足）の活動について報告があった。

浦安市立中央図書館長竹内紀吉氏の報告は、「浦安市における図書館システム」についてであった。浦安市では、市民が歩いてほぼ10分以内のところに分館を作り、これらの分館を中央図書館とオンラインで結ぶシステムを作ることによって、住民サービスの格差を失くし、現在は、学校図書館とのオンライン化を模索中とのことであった。コンピュータの導入によって、外部データベースの利用が可能になり、J-BISCやバイブルズ、ノックスなどを使って、未所蔵資料などへの対応しており、レファレンス業務の強化に役立っていること、また、千葉県においては、

電算化した図書館は、相互貸借が活発化している傾向が見られるという指摘があった。

現在、千葉県では市立図書館の大型化、書庫の大型化が顕著で、浦安市立図書館においても、大型書庫が完成したら、資料的価値の低いものを閉架で、価値の高いものは開架でというように、むしろ従来の書庫の概念を逆転させたいという。マスコミが報じた人文系中小出版社に対象をしばって、それらの出版社のものを徹底収集するという浦安市立図書館が打ち出した方針については、こうした選択が、将来的には、図書館間の分担収集を促し、県レベルで図書館の自立が可能となるというビジョンをもつてのことだそうである。住民のニーズに応じていくためには、あらゆることを試みてみたいという熱意に満ち溢れた報告であった。

発表は以上であるが、講演を聞いていると、ネットワークは、公共図書館にとって差し迫った課題であり、またそのような共通認識は自明のことのようであった。しかし、一方でネットワークという言葉は、図書館界に限らずはやり言葉のような使われ方をしているため、何かネットワークが自己目的化している感もする。そうした印象を払拭するためには、現在図書館が直面している問題の具体的な掘り下げが不可欠であろう。図書館にとって、ネットワークは目的ではなく、手段なのであるから、図書館の内側に、その形成に向かって邁進する動機や必然性が強固に存在することが、ネットワーク論議を説得力のあるものにする。その意味で、その動機や必然性がいまだ抽象（34ページへ続く）

参考文献

“Лубок ; русские народные картинки xvii-xviii вв.”

Москва, Сов. художник, 1968. <КС348-32>

“The Lubok ; Russian folk pictures, 17th to 19th century.”

Leningrad, Aurora Art Publishers, 1984. <КС348-112>

СЫГин, Иван Дмитриевич. “Жизнь для книги.”

Москва, Политиздат, 1960. <УМ31-7>
(よこた・かずよ 参考課)

(20ページより続く)

的に語られているという印象をもった。それは、専ら講師の話聞くという集会で、そこに集まった参加者の意見を聞く時間がなかったためかも知れない。

図書館から寄せられるレファレンスの処理に日々追われている立場から見て、レファレンス業務の連携協力の緊密化、効率化は、切実な課題である。当館が機構改革により図書館サービスの窓口を一

本化したことに伴って、この課題はより一層顕在化しているように思われる。

レファレンスの量的な増大にどう対応するか、また所蔵機関調査の増大という形で顕在化している資料の所在情報へのニーズにどう対応していくかが問われている。私にとっては、ここにネットワーク論議との接点がある。

(すずき・なおこ 参考課)